

「いいのよ」と語った認知症クライアント

湘南 OT 交流会

藤本一博

【はじめに】

作業療法の魅力を感じる実践であり、楽しい臨床であるが、他の団体で発表するには抵抗があるため、WEB 学会で認知症のクライアントとの関係性から生じた、くすっとしてしまう事例を報告する。なお、家族から本ケースとの日々を発表する同意を得ている。

【事例紹介】

脳血管性の認知症を呈し、療養病棟に入院している 80 歳代の女性 A 氏である。HDS-R では 3 点と復唱が行える程度であり、認知症は重度であったが、言語的コミュニケーションは可能であり、テストが行える状態であった。身体機能面では軽度の左片麻痺もあり、軽介助で多くの動作が行えるが、安全性に配慮が出来ない認知機能であったため、行動を制限されている状態であった。そして感情失禁を起こしやすく、笑いながら泣く事が多い誰からも愛される方であった。

【利用した概念】

OT 臨床あるあるを利用した。OT 臨床あるあるは、学会発表には載らず、学会の夜の懇親会等で広く披露され、OT に明日の活力を与えるものである。

【経過】

作業療法では週に 2 回と少ない時間であるが、身体機能を維持しつつ、ADL 介助量を多くしない為のトレーニングや、認知面を維持する集団でのコミュニケーションを中心に提供していた。介入当初は、毎回担当の顔や名前を忘れており、「初めまして」という挨拶をして頂いていたため、「3 日前に会いましたよ」と訂正すると、笑い泣きをしながら「ウソよ～そうだった？」といったやりとりが続いた。2 ヶ月も経過すると徐々に顔を覚え始め、笑い泣きをしながら「待っていたのよ」と言ってくれるようになった。そのため「私も会いたくて 5 分も早く来ちゃいました」など、冗談を言い続ける日々を続けた。この介入により認知機能は保たれ、OT 時間以外でも表情は明るく、笑い泣きをしながら様々な方と話をする為、病棟のアイドル的な存在となっていた。

3 ヶ月が経過した頃、A 氏と OT とのコミュニケーションに変化が起こっていた。いつものように A 氏の部屋に入ると「もう！なんで来てくれなかったの！待っていたのに！！」と泣きながら怒られる日が多くなったのである。そのため「ごめんなさい。週に 2 回しか来れないのです。いつものように。」と返答をすると「うそよ！毎日来てくれたじゃない！」や「ごんちゃんは、私とずっと一緒」など、泣きながら訴えてくるようになった。「ごんちゃんって誰ですか？」と聞くと「あなたよ！」と言っていた為、「私の名前ってなんでしたっけ？」と聞くと「ごう〇〇さん、だからごんちゃん」と述べたため、「私は藤本ですよ」と返すと「そんなわけないじゃない！嘘ばかり！いつから名前が変わったのよ！」と泣きながら笑っていた。「生まれた時から・・・」と返答すると、「またそんなことばかり言って！」と受け入れてもらえない状態であった。そんなやり取りをし続けた結果、A 氏は奇妙な行動に出た！

【結果】

A 氏はシングルの介護用ベッドに寝ていたが、端に寄り始め OT のいる側の半分の隙間を空けた。そしてそちら側の布団をまくり、一言「いいのよ」と発し、OT をベッドに誘った。

【考察】

A 氏は OT に何を求めていたのか、ごんちゃんと勘違いされており、ごんちゃんとはそういう関係だったのか、様々な疑問が残るが、OT の臨床を長年行っている中で、A 氏との関わりは忘れられないエピソードの 1 つとなった。作業療法って本当に楽しい職業ですね。